

国際イメージと国際情報

——日本と中国に関する事例研究——

真 鍋 一 史*
劉 志 明**

この研究は、国際イメージと国際情報に関する研究の一環としてなされたものである。

国際イメージと国際情報というテーマの重要性については、いまさら多くを語る必要はないであろう。世界の国々にがもはやそれぞれ単独で諸問題を解決していくことが不可能になり、そこで地球全体の連帯が常に求められるようになってきた現代社会にあっては、国際コミュニケーションという課題は何ものにも替えがたい重みを持つものといわなければならない。そして、この国際コミュニケーションを促進あるいは疎外する決定的な要因のひとつが国際イメージであり、その国際イメージをポジティブあるいはネガティブの方向に導くものが国際情報にはかならないのである。

さて、筆者は、このような問題関心から、これまで国際イメージと国際情報に関する研究領域における理論的系譜を踏まえつつ、さまざまな実証的研究に取り組んできた。今回ここで取り上げるのは「日本と中国のお互いのイメージとそれぞれの国におけるお互いの国・人・社会・文化に関する情報」というテーマである。

ところで、このようなテーマに対する筆者の接近の方法は「大規模な質問紙調査のデータ解析にもとづく日中相互イメージの諸相」と「日中両国において生産され・流通し・蓄積されているお互いの国・人・社会・文化に関する情報の内容分析の結果」を対照させることによって、両者の関係を検証していこうというものである。

まず、前者については、筆者が社団法人アジア調査会と毎日新聞社との共同プロジェクトとして実施した2回にわたる「日中イメージ共同世論調査」のデータが利用できる。その報告が第1部で

ある。

つぎに、後者については、現在、共同研究者である中国人民大学新聞学院の劉志明講師によって精力的に進められている「日本情報についての内容分析」の作業がある。このような日本情報としては、

- (1) 中国の「国語」「歴史」などの教科書——小学校、中学校、高等学校——における日本情報
- (2) 中国の新聞における日本関連の記事・評論
- (3) 中国のテレビにおける日本関連の番組・評論
- (4) 広告における日本情報
- (5) 映画における日本情報
- (6) 日本から輸入された映画・テレビドラマ・アニメ
- (7) 大衆文学・漫画における日本情報
- (8) 翻訳された日本の小説・戯曲

などがあげられるが、今回は(1)にかぎって、その「内容分析」の結果を報告しておきたい。それが第2部である。

(真鍋一史)

* 関西学院大学社会学部教授

** 中国人民大学新聞学院講師

第1部

日中相互イメージの諸相とその変化の方向

——サーベイ・データの通時的分析——

I. はじめに

この小論は、筆者が(社)アジア調査会と毎日新聞社との共同プロジェクトとして実施した2回にわたる「日中イメージ共同世論調査」(第1回は日中平和友好条約締結10年にあたる1988年12月に、第2回は日中国交正常化20周年にあたる1992年11月にそれぞれ実施)の結果のデータ解析をとおして、日本人と中国人がそれぞれお互いの国(人も含めて)に対してどのようなイメージを持っており、それが時間の経過とともにどのように変化してきたかを明らかにすることを目的とするものである。

このような研究は、つぎのような「現実的要請」と「学問的要請」のいずれにもこたえるものといえる。近年、日中間の交流はさまざまな側面において急速に進展しつつある。しかし交流の障害となる要因も相変わらず存在している。それは、制度的な要因以外では心理的な要因が大きいと考えられる。今後、お互いに隣国である中国と日本はより密接な友好関係を作り上げていかなければならぬが、そのためには何よりもお互いがお互いをよりよく知るとともに、よりよいイメージを持つことが大切になってくる。この研究はまさにこのような「現実的要請」にこたえるものといえるのである。

つぎに「学問的要請」であるが、この点については、研究の「対象」と「方法」の区別にもとづいて考察を進めていきたい。そこでまず「対象」であるが、国際交流の進展にともなって、日本においても「対外イメージの研究」や「対日イメージの研究」がかなり進んできており、すでに相当の研究の蓄積もできてきている。ところが、これまでの研究では、近隣の国々に、とくに中国がその調査対象国として取り上げられることが少なかった。それは、ひとつには、中国での調査がさまざまな理由でかなり困難なものであったというこ

とがある。しかし開放政策を急速に進める中国では、最近、世論調査の重要性に対する認識が高まりつつあるといわれる。そこで中国を国際イメージ研究の調査対象国に取り入れていくことは、きわめて重要な今日的課題となってきたのである。

つぎに「方法」であるが、これについてはひとまず、つぎの点を指摘しておきたい。近年、外国における日本への関心の高まりにともなって、外国人による日本「人・社会・文化」論や「対日イメージ」論がかなりの数になってきている。しかしこれらの多くは個人的印象にもとづく「随筆」や、個人的解釈にもとづく「評論」であって、外国人の心づきが日本や日本人をどう見ているかを大量観測的な質問紙調査という方法によってとらえた実証的データはまだ少ない。とくに中国についてはそのようなデータがほとんどないというのが現状である。今回のような「日中イメージ共同世論調査」のデータ解析がきわめて重要なものとなってくる所以である。

II. 日中相互イメージの諸相とその変化の方向

質問紙調査のデータ解析は、一般に、つぎの4つの種類に分けられる。①個々の質問項目に対する回答の集積的分布(具体的にいえば、個々の質問項目に対する回答のパーセンテージ)がどのようになっているかをとらえようとする「記述分析」、②そのような集積的分布が回答者の社会的属性(性別、年齢別、学歴別、職業別、生活程度別など)ごとにどのように異なるものであるかをとらえようとする「条件分析」、③質問諸項目間の関係が相互にどのようなものであるかをとらえようとする「構造分析」、④以上の①②③がそれぞれ時間の経過にともなってどのように変化するかをとらえようとする「変容分析」、がそれである。

ここでは、まず①と④を組み合わせた分析から

始めたい。それは、具体的にいえば、日中イメージ調査の共通の質問項目に対する回答の集積的分布を、①質問諸項目ごとに、②1988年（第1回調査）と1992年（第2回調査）について、それぞれ「比較」することをとうして、日中相互イメージの諸相とその変化の方向を明らかにしていこうということである。その場合、まず第2回調査の結果のパーセンテージを示し、づきにその数値が第1回調査と比べてどのように変化してきているかを示すという手順をとりたい。ところで、この分析に移るに先立って、「日中イメージ共同世論調査」の方法と内容についても説明しておかなければならない。しかしここでは紙面の余裕がないので、前者については〈付録1〉に譲ることにし、後者の日本と中国のお互いのイメージをとらえる質問諸項目については、従来のイメージ成分論（鮑戸弘『イメージの心理学』、潮出版社、1970年）やファセット理論（D. Canter ed., Facet Theory, Springer-Verlag, 1985）にもとづいて、それを「態度的成分（Attitude）に関する諸項目」と「関与的成分（Involvement）に関する諸項目」に分けたということを記すにとどめたい。

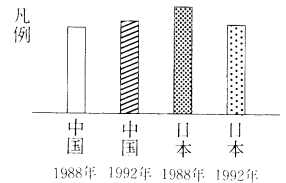
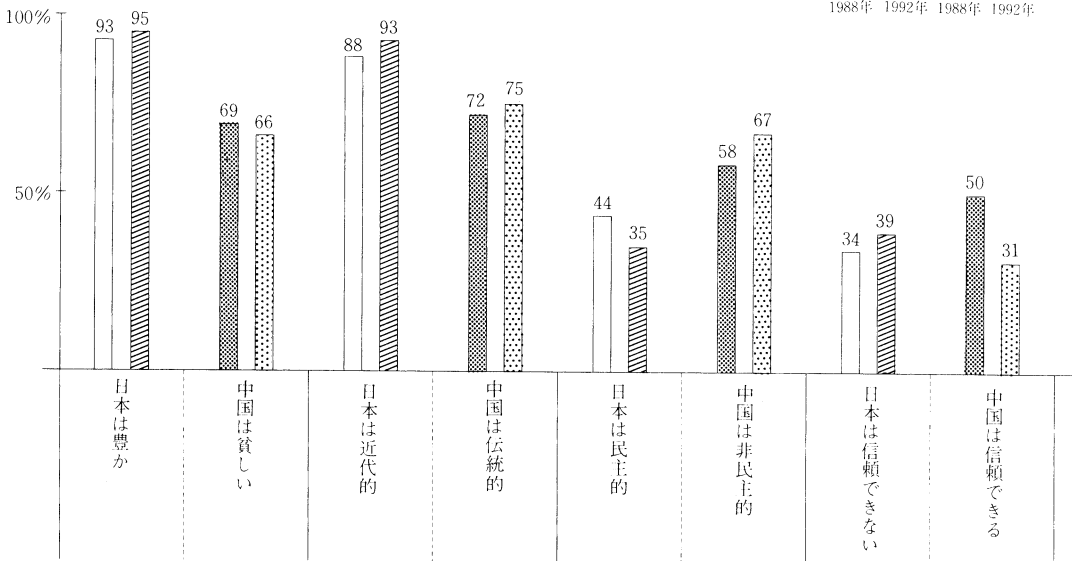
〈A〉イメージの「態度的成分（Attitude）」に関する分析

1. お互いの国のイメージ

日中両国民はお互いの国についてどのようなイメージを持っており、それはこの4年間にどのように変化してきたのであろうか。この調査では、お互いの国のイメージを「豊か—貧しい」「近代的—伝統的」「民主的—非民主的」「信頼できる—信頼できない」という反対語で構成される4つの形容詞の対を7段階尺度（たとえば、1番目の尺度は「非常に豊か」「かなり豊か」「やや豊か」「どちらともいえない」「やや貧しい」「かなり貧しい」「非常に貧しい」というものである）で評定してもらった。しかしこれら7つの段階ごとの回答の％を個々に報告するのは繁雑であり、またそうすることによってかえって全体の傾向がつかみにくくなるということもある。そこでこれら7段階ごとの％に特筆すべき顕著な傾向が見られないかぎり、「どちらともいえない」をはさむ3段階の回答の％を加算して比較するという方法をとることにする（ここでの例でいえば、回答は「豊か」「どちらともいえない」「貧しい」の3段階にリコード

図1 お互いの国のイメージ

あなたは「日本」についてどのようなイメージを持っていますか。
〔日本側では「中国について～」と聞いた〕
〔「非常に」+「かなり」+「やや」の％〕



されることになる)。

まず日本では、中国を「貧しい」66% (前回69%)、「伝統的である」75% (同72%)、「非民主的である」67% (同58%) と見る人の割合が高いが、中国が信頼できるかどうかでは回答者は「信頼できる」31% (前回50%) と「信頼できない」32% (同17%) の2つの極にほぼ同じ割合で分かれていることがわかる。

これに対して、中国では、日本を「豊か」95% (前回93%) で、「近代的」93% (同88%) と評定する人が圧倒的に多数を占めるが、日本が民主的かどうかについては「どちらともいえない」43% (同43%) としてその評定を保留する人の割合が高く、それだけ「民主的」35% (同44%) と答える人の割合が低くなっている。そして、日本が信頼できるかどうかでは「信頼できない」39% (同34%) とする人の割合が、「信頼できる」26% (同26%) とする人の割合よりも10%強も高くなっているのが目立っている (図1)。

つぎに4年前の第1回調査との比較であるが、日本人の中国イメージでは、中国を「非民主的」とする回答が10%近く増加しており、それと対応する形で中国は「信頼できる」とする回答が20%ほど減少(「信頼できない」とする回答が15%も増加)していることが注目される。

さらに、この結果を7段階尺度にもどして、もう少し詳細に見ていくなれば、中国人の日本イメ

ージでは「豊か」と「近代的」については、いずれも「非常に」のところでの%が高くなっていること、日本は民主的かどうかでは「やや民主的」が減少し、「やや非民主的」が増加していること、日本が信頼できるかどうかでは「非常に信頼できない」という「厳しい」回答が減り、「やや信頼できない」という「穏やかな」回答が増えていること、などがわかるのである。

2. お互いの国と人に対する好感度

ここで取り上げる質問諸項目については、まずつぎの3つの点を記しておきたい。(1)「好きか、嫌いか」とういのはいわば感情表出的な質問であり、さまざまな複雑な要素が一点に凝縮された項目である、(2) 国際イメージの研究では、人びとのイメージ(「好きか、嫌いか」はその感情的要素)の対象として「国」と「その国の人びと(国民)」が区別されてきた、(3) 好感「度」という場合、それは、①個人がある対象に対してどのくらい「好き(あるいは「嫌い)」という回答をしているかというその回答の「強さ」、②どのくらいの人びとがある対象に対して「好き(あるいは「嫌い)」という回答をしているかというその回答者の「多さ」、を意味するものとして用いられるが、ここでは回答の%という形での集会的現象が問題となるので②の用法をとる、ということである。

図2 お互いの国に対する好感度

あなたは「日本」が好きですか、それとも嫌いですか。
〔日本側では「中国が～」と聞いた〕

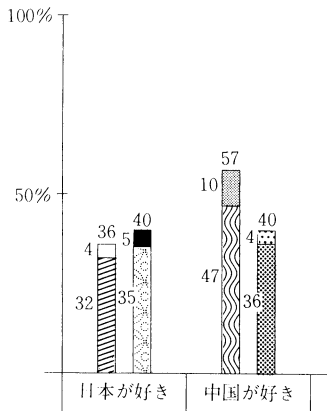
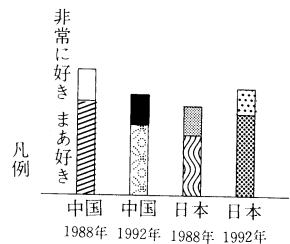
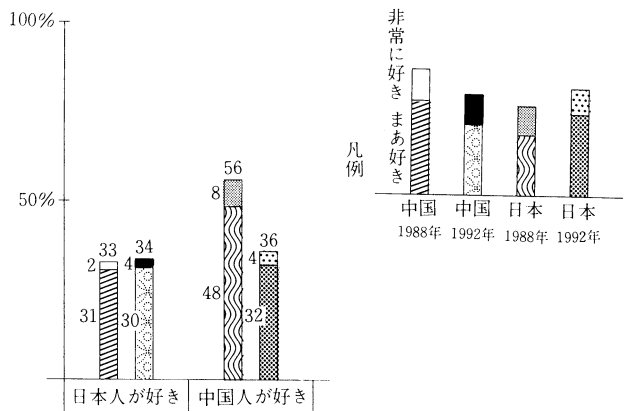


図3 お互いの国民に対する好感度

あなたは「日本人」が好きですか、それとも嫌いですか。
〔日本側では「中国人が～」と聞いた〕



(1) お互いの国に対する好感度

日本では中国が「好き（「非常に好き」と「まあ好き」の計）」は40%（前回57%）、「どちらともいえない」45%（同35%）、「嫌い（「少し嫌い」と「非常に嫌い」の計）」は13%（同6%）となっている。

他方、中国では日本が「好き（「非常に好き」と「まあ好き」の計）」は40%（前回36%）、「どちらともいえない」31%（同35%）、「嫌い（「非常に嫌い」と「少し嫌い」の計）」は29%（同28%）という結果である。

「好き」については、日中両国とも、全く同じ数値となったが、両国の相違点は中国のほうで「日本が嫌い」の%が高く（「中国が嫌い」の13%に対して「日本が嫌い」は29%）、ほぼその分だけ日本では「どちらともいえない」の%が高くなっている（「日本が好きか嫌いかはどちらともいえない」の31%に対して「中国が好きか嫌いかはどちらともいえない」は45%）という点にある（図2）。

つぎに前回の調査との比較では、中国では「日本が好き」が36%から40%に上昇（「日本が嫌い」はほとんど変化なし）して、日本への好感度——どのくらいの人びとが日本が好き」と答えているかという意味での好感「度」——の「高まり」（あるいは「広がり」）をわずかながらも見せているのに対して、日本では「中国が好き」が57%から40%へと大きく下降（「中国が嫌い」は6%から13%へと上昇）してきているという点が特筆される。

(2) お互いの国民に対する好感度

日本では中国人が「好き（国の場合と同じく2つのカテゴリーを加算した%、以下同じ）」は36%（前回56%）、「どちらともいえない」50%（同38%）、「嫌い」は10%（同5%）、中国では日本人が「好き」は34%（同33%）、「どちらともいえない」32%（同39%）、「嫌い」は33%（同27%）という——つまり「好き」「どちらともいえない」「嫌い」がほぼ1/3ずつという——結果となった。ここで「好き」の%は日中ともほぼ同じ割合となったが、「嫌い」の%が日本に比べて中国のほうで20%強も高くなっている点は目を引くところである（図3）。

また「国に対する好き、嫌い」と「人に対する好き、嫌い」を比べて、日本の調査では「中国が好き」の%（40%）は「中国人が好き」のそれ（36%）より、そして「中国が嫌い」の%（13%）は「中国人が嫌い」のそれ（10%）より、それぞれ数%ずつ高くなっている。つまり「国」の方で「好き、嫌い」の分極度がわずかながらではあるが高くなっている——そのために「どちらともいえない」としてその判断を保留する回答者の割合が「国」の場合（45%）に比べて「人」の場合（50%）で5%ほど高くなっている——のである。これに対して、中国の調査では「日本が好き」の%（40%）は「日本人が好き」のそれ（34%）よりも高くなっているものの、「日本が嫌い」の%（29%）は逆に「日本人が嫌い」のそれ（33%）よりも低くなっている——つまり「嫌い」という反応は「国」に対する場合よりも「人」に対する場合でわずかではあるが高くなっているのである——。これは相対的には小さな数字であるにしても、やはり中国人の対日イメージの分析においては重要なポイントのひとつになってくるといえるかもしれない。

つぎに前回の調査との比較では、日本では「中国人が好き」が56%から38%に激減、「嫌い」が5%から10%に倍増した。この傾向は「国」の場合のそれと軌を一にするものといえる。他方、中国では「日本人が好き」の回答にはほとんど変化が見られないものの、「嫌い」は27%から33%へと5%ほど増えているのである。

3. 日中関係の認知度と評価度

ここでは「中国と日本の関係は今後5年間により方向に進むかどうか」と「今後中国と日本の国際交流はさかんにするべきかどうか」という2つの質問項目を取り上げる。前項の「お互いの国が信頼できるか、できないか」や「お互いの国やその国の人びと（国民）が好きか、嫌いか」も含めて、これらの質問項目が作成された背後には、社会学や社会心理学の領域における共有財産としての「イメージ・態度・志向構造論」がある。これによれば「お互いの国が信頼できるかどうか」と「お互いの国やその国の人びとが好きか、嫌いか」はその「感情的要素」に、「中国と日本の関係は今

後5年間によい方向に進むかどうか」は「認知的要素」に、「今後中国と日本の国際交流はさかんにすべきかどうか」は「評価的要素」にそれぞれ対応するものといえるのである。そしてこれまでの理論によれば「評価的要素」は「感情的要素」と「認知的要素」によって条件づけられるという。このような理論的準備を踏まえて、つぎに調査結果を見ていくことにする。

(1) 日中関係の将来

日本では、中国と日本の関係は今後5年間に「よい方向に進む(「非常に」と「まあ」の計)」が65%(前回80%)、「どちらともいえない」27%(同16%)、「わるい方向に進む(「少し」と「非常に」の計)」は2%(同3%)、中国では、これが順に、69%(前回50%)、29%(同44%)、2%(同5%)となっており、日本に比べて中国のほうで今後の日中関係への期待が高いことがうかがわれる(図4)。

前回の調査との比較では、日中両国で対照的な結果が出てきている。それは、日本では「よい方向に進む」が80%から65%に減少しているのに対して、中国ではそれが逆に50%から69%にまで増加してきているということである。つまりここでは日中関係の将来に対する両国民の見通しにかなり大きな“ズレ”が見られるのである。

図4 日中関係の将来

中国と日本との関係は、今後5年間によい方向に進むと思いますか。それともわるい方向に進むと思いますか。

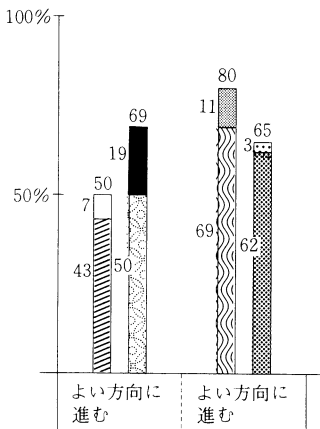
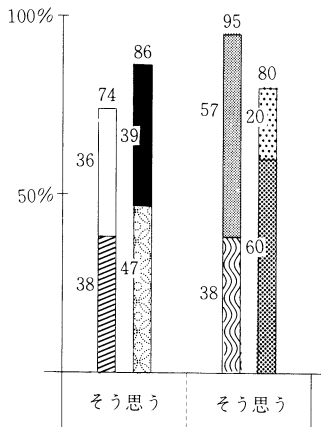


図5 日中間の国際交流

あなたは、今後、中国と日本の国際交流はさかんにすべきだと思いますか。それともそうは思いませんか。



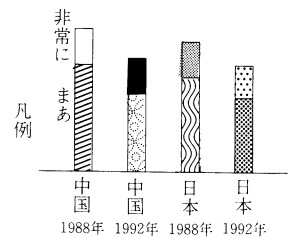
(2) 日中間の国際交流

「今後中国と日本の国際交流はさかんにすべきかどうか」については、日本では「そう思う(「非常に」と「まあ」の計)」が80%(前回95%)、「どちらともいえない」13%(同4%)、「そう思わない(「あまり」と「まったく」の計)」が4%(同1%)で、中国ではこれが順に86%(同74%)、10%(同16%)、4%(同9%)となっており、日本に比べて中国のほうで日中間の国際交流への熱意がより高いようである(図5)。

さて、以上で「イメージ・態度・志向」の3要素についての5つの質問項目の調査結果を見てきたが、ここで日本と中国の回答者に見られる類似点と相違点をもう一度まとめておきたい。

まず類似点であるが、それはそれぞれの質問文に対してポジティブに反応する回答者の割合が「お互いの国が信頼できる(感情的要素)」→「お互いの国の人びとが好き(感情的要素)」→「お互いの国が好き(感情的要素)」→「日中関係はよい方向に進む(認知的要素)」→「日中間の国際交流はさかんにすべき(評価的要素)」という順で高くなっているということである。この点については「イメージ・態度・志向構造論」に対してつぎの2つのことが示唆されよう。

①「信頼できるかどうか」や「好きかどうか」



という感情的要素というのが人間の心の動きの最も core の部分にあり、それを「今後両者の関係はよい方向に進む」という認知的要素が取り囲み、さらにその外側に「今後両者の交流はよりさかんにするべきである」という評価的要素が位置しているというモデルが描かれるかもしれない。

②「評価的要素」は「感情的要素」と「認知的要素」によって条件づけられているというよりも、そこにはそれとは全く別の原理が働いているようにも思われる。中国の調査データを例にとれば、そこでは日本や日本人に対する好感度によって方向づけられて、日本との交流を進展させようという回答が出てきているというよりも、むしろ日本との交流が中国という「国」にとっても、また中国人という個々の「人」にとっても、その発展と繁栄のためにはどうしても必要であるからという「手段的＝機能的志向性」によって、日本との交流をさかんにするべきであるという回答が出てきている、と考えられないであろうかということである。

つぎに相連点であるが、これは「感情的要素」「認知的要素」「評価的要素」のすべてにおける中国側の日本へのポジティブ化の方向性と日本側の中国へのネガティブ化の方向性ということにまとめられるであろう。そしてこの点については、前者には中国の急速な開放改革路線にともなう対日現実志向の高まりが、また後者には1989年6月の「天安門事件」とそれをめぐる当時のマス・メディアの報道・解説の内容が、それぞれ大きく影響

しているという仮説を立てておきたい。

4. 今後の交流の分野

「今後の日中関係にとって、とくにどの分野の交流が最も重要になってくると思うか」という質問でも、日本と中国で対照的な結果が出ている。それは、どちらの国においても「貿易・経済」の割合が最も高くなっている（日本44%、中国45%）という点を除けば、一方の日本ではその割合が比較的高いところをあげてみるならば「科学・技術」（9%）、「外交・政治」（13%）、「文化・芸術」（14%）、「旅行・観光」（9%）などがあるが、他方の中国では「科学・技術」が41%までを占め、それ以外の分野はいずれもきわめて小さな%にとどまっているということ——つまり日本側での交流の分野の多様化に対して、中国側ではそれが一元化の傾向を示しているということ——である（図6）。

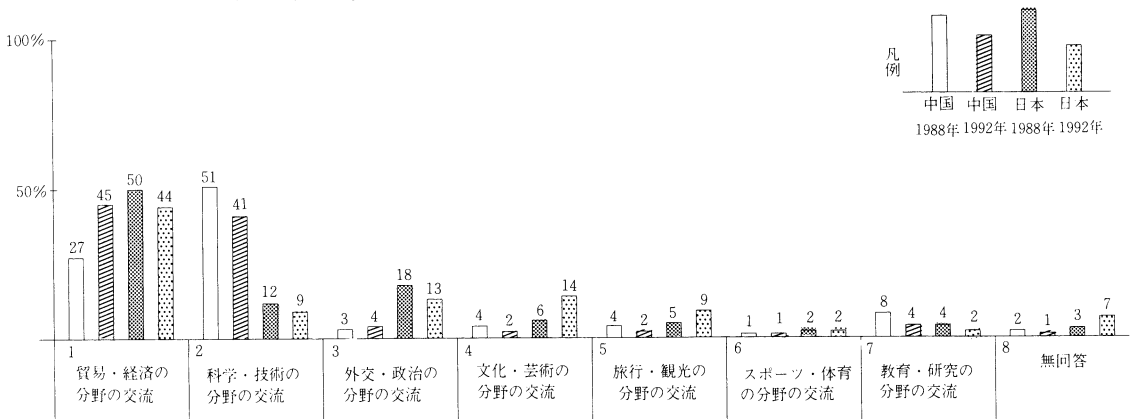
前回の調査と比べると、日本では「貿易・経済」（50%→44%）、「科学・技術」（13%→9%）、「外交・政治」（18%→13%）が減少し、それにかわって「文化・芸術」（6%→14%）、「旅行・観光」（5%→9%）が増加している。

これに対して、中国では、「貿易・経済」（37%→45%）が増加し、「科学・技術」（50%→41%）、「教育・研究」（8%→4%）が減少している。

ここでも「貿易・経済」が日本では6%ほど減少し、中国では8%ほど増加する——これも中国の改革開放の加速にともなう「経済」優先の考え

図6 今後の交流の分野

あなたは今後の中日関係にとってとくにどの分野の交流が重要になってくると思いますか。最も重要になってくると思うもの一つだけ選んで下さい。



方の影響といえないであろうか——という対照的な傾向があらわれている。

〈B〉イメージの「関与的成分 (Involvement)」に関する分析

1. マス・コミュニケーションによるお互いの国に関する情報への接触度

日中両国民のお互いの国に関する情報への接触度——どのくらいの人びとがその情報に接しているかという集合的な意味での接触「度」——を「テレビ」と「新聞」についてとらえてみた。

まず「テレビ」については、日本では「ある(しばしばある」と「ときどきある」の計)」が82% (前回92%)、「ない(「ほとんどない」と「まったくない」の計)」が18% (同7%)、中国では「ある」が90% (同94%)、「ない」が10% (同6%)という結果となった。

つぎに「新聞」については、日本では「ある」が70% (同86%)、「ない」が30% (同12%)、中国では「ある」が66% (同60%)、「ない」が34% (同40%)となった(図7)。

このような結果から、日本、中国ともに「新聞」よりも「テレビ」のほうで接触度が高く、また「テレビ」では日本よりも中国のほうが高く、「新聞」では中国よりも日本のほうが高い、ということが

わかる。

さらに前回の調査結果との比較では、日本については、「テレビ」、「新聞」ともに、その接触度が大きく減少してきている。「テレビ」で10%の減少、「新聞」で16%の減少、またいずれについてもそれは「しばしば」のところの減少の結果として出てきている)ことがわかる。

ところが中国については、「テレビ」では同じようにその接触度に減少傾向(4%という小さなものではあるが)が見られるものの、「新聞」では逆に増加傾向(6%ではあるが)が示されているのである。

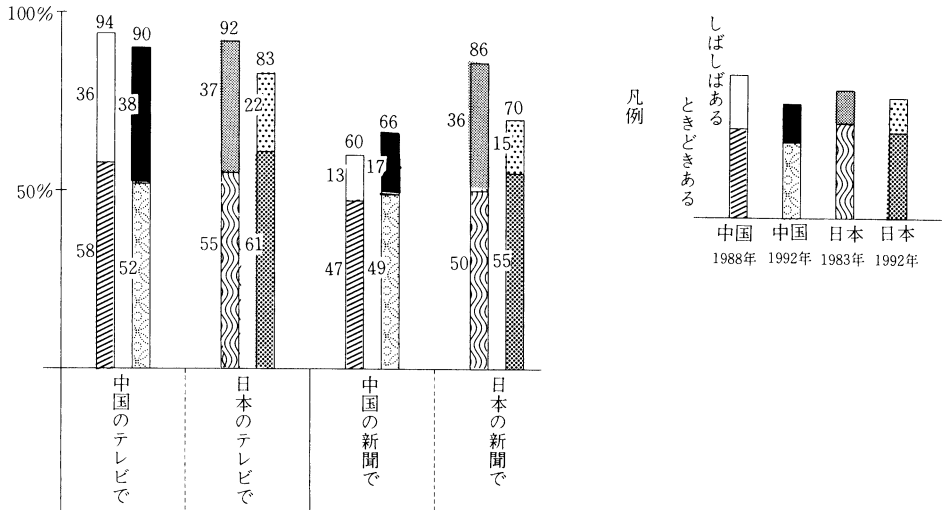
以上の知見が何を意味しているかについてはいくつかの仮説を立てることができるであろう。

①これらの接触度はそれぞれの情報そのもの——つまり中国情報あるいは日本情報——に対する人びとの関心の度合いを反映したものであるというものである。つまり接触度に変化がでてきたのは、人びとのお互いの国に対する関心の度合いに変化が出てきたからであるという仮説である。いうまでもなく、この仮説は、「情報への選択的接触と認知的不協和の理論」から演繹的に導き出されたものである。

②これら接触度の順位とその変化は、それぞれのメディア——つまり日中両国のテレビと新聞

図7 マス・コミュニケーションによるお互いの国に関する情報への接触度

あなたはつぎにあげるようなメディアで日本について読んだり、見たり、聞いたりすることがどの程度ありますか。(日本側では「中国について～」と聞いた)



——が実際に日本あるいは中国について情報を伝えているその分量を反映しているという仮説である。

③これらの接触度の順位とその変化は、人びとの普段の日常生活におけるこれらのメディアへの接触度——これは「それぞれのメディアの普及状況などの社会的要因を中心とする availability 変数」と「人びとがそれぞれのメディアをどのくらいおもしろいと思っているかなどの心理的要因を中心とする interest 変数」との関数と考えられる——を反映したものであるというものである。つまりそれぞれのメディアに対する人びとの普段の接触度の違いとその変化が、ここでの「日本あるいは中国」情報への接触度の違いと変化をもたらしているという仮説である。

いうまでもなく、これらの諸仮説はそれぞれが組み合わせられて考えられるべきものであり、またその検証のためには「内容分析」を始めとして今回の調査とは別のデータが必要となってくる。

そのような厳密な検証作業はしばらく置くとして、ここでは諸知見の読み取りのために、さらにつきのような仮説を提示しておくこととする。

①日本においては、「天安門事件」を契機として、近年しだいにもりあがりつつあった、ある種の「中国熱」が急にさめていったが、それがメデ

ィアによる中国情報への接触度の変化に明確にあらわれているというものである。

②中国においては、テレビについて見られた接触度の4%の減少というものも、じつは「しばしばある」での逆に2%の増加(36%から38%へ)と「ときどきある」での6%の減少(58%から52%へ)とが差引きされて出てきたものであるということからも明らかになるように、それは決して単純な直線的な減少とはいえないところがあるということである。

2. パーソナル・コミュニケーションによるお互いの国に関する情報への接触度

ここでも接触度というのはひとつの集合的な指標であり、両国民のなかにはお互いの国について家族や友人と「しばしば」ないしは「ときどき」話し合っている人がどのくらいの割合でいるかということである。これを前項のメディアの場合と同じ方法でとらえてみた。

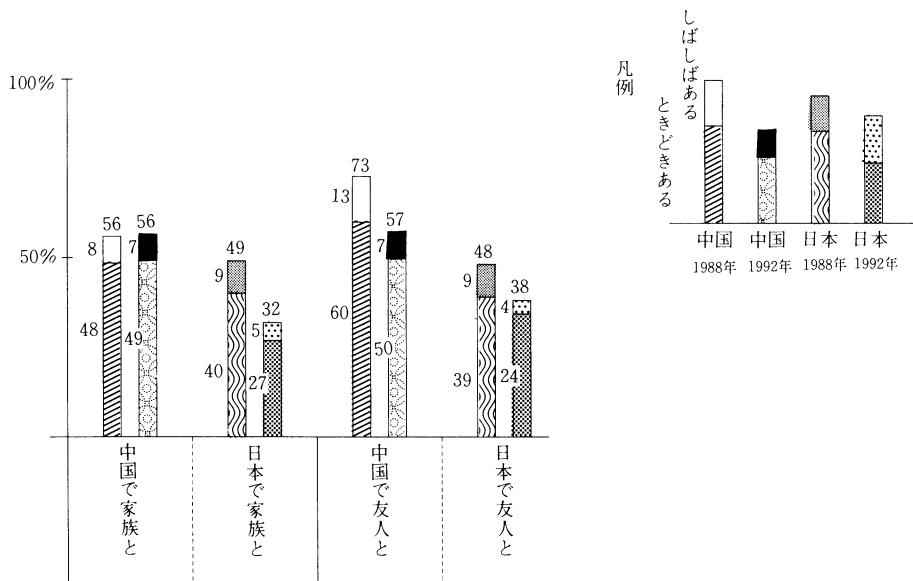
まず「家族」については、日本では「ある」が32%(前回49%)、「ない」が68%(同48%)、中国では「ある」が56%(同56%)、「ない」が44%(同44%)となった。

つぎに「友人」については、日本では「ある」が28%(同48%)、「ない」が72%(同49%)、中国

図8 パーソナル・コミュニケーションによるお互いの国に関する情報への接触度

あなたはつぎのような人たちから日本について聞いたり、お互いに話し合ったりすることがどの程度ありますか。

(日本側では「中国について～」と聞いた)



では「ある」が57% (同73%)、「ない」が43% (同27%) という結果となった (図8)。

日中両国と比べて、「家族」の場合でも、「友人」の場合でも、相手の国について少なくとも「ときどきは話す」という割合は中国のほうで高くなっている (「家族」で24%の差、「友人」で29%の差)。また前回の調査結果と比べて、日本では「家族との話し合い」も「友人との話し合い」もともに減少しているのに対して、中国では「友人との話し合い」は減少しているものの、「家族との話し合い」では変化はとくに見られないのである。ここでも、日本については、ある種の「中国熱」がさめてきている状況が示唆されていると考えられるが、中国については、一概にそうはいえないところがある。それは共同研究者の一人である中国人民大学の沙蓮香教授の提案にもとづいて、中国での調査では「家族」「友人」以外に、「職場の同僚」という質問項目も設定してみたが、その結果、少なくとも「ときどきは職場の同僚と話し合う」という回答が77% (「しばしば」11%と「ときどき」66%の計) にも達したということもあるからである。

Ⅲ. おわりに

—— 諸知見をめぐる若干の考察 ——

以上において、「日中イメージ共同世論調査」のデータ解析の結果を、とくに「記述分析」とその「変容分析」にかぎって報告してきた。ここで、もう一度、これら諸知見のまとめをしておきたい。いうまでもなく、それは日中相互イメージに関するこの調査報告が「木を見て森を見ず」の結果に終わらないためである。

さて、中国の人びとの多くは日本は「豊か」で「近代的」な国であると思っているのに対して、日本の人びとの多くは中国は「貧しく」て「伝統的」な国であると思っている。ここで同じく「多くの人びと」という表現を用いたが、それが一方の中国の人びとの場合は90%をさらに越えているのに対して、他方の日本の人びとの場合は60%から70%どまりとなっている。つまり日本人の中国イメージに比べて、中国人の日本イメージのほうがより一様化しているといわなければならないので

ある。しかし「民主的かどうか」については、中国でもこの様なイメージはくずれ「どちらともいえない」として回答を保留する者の割合が高くなる。通時間的に見ても、一方で「日本は近代的」と見る人が多くなるとともに、他方で「日本は民主的」と考える人が少なくなっている。ここでは「民主的」ということは中国においては「近代的」ということの内容のひとつには含まれないのであろうかという疑問が提示されよう。

つぎに人びとのイメージの3要素、つまり「感情 (「好きな国か」「好きな国民か)」「認知 (「日中関係はよい方向に進むか)」「評価 (日中間の交流はさかんにすべきか)」については、おしなべて中国側の日本へのポジティブ化の方向と日本側の中国へのネガティブ化の方向が見られる。しかし中国側のポジティブ化の方向といっても、それは「認知」や「評価」という項目でとくに顕著に見られるのであって、人間の心の動きの最も core な部分を構成していると考えられる「感情」や「信頼」という項目では必ずしもそれらと完全に符号した傾向とはなっていない。そこでこの点について、筆者は、「手段的=機能的志向性」という用語を用いて説明を試みた。つまり「日中関係はよい方向に進む (認知)」とか「日中間の交流はさかんにすべきである (評価)」とかで高い数値が出てきているのは、日本や日本人が「好きかどうか」や「信頼できるかどうか」といった感情の動きを越えて、それが中国という「国」にとっても、中国人という個々の「人」にとっても、その発展と繁栄のためにはどうしてもそうなってほしいとか、あるいはそうしなければならないというような集合的意見が形成されてきているからであると考えたのである。

では、その交流はどの分野で進めるべきかという、中国側ではそれは「貿易・経済」と「科学・技術」という2分野にほとんど限られてしまっている。この点も、日本側での回答の多様化傾向と対照的な結果となっており、やはり一元化の方向と表現せざるを得ないであろう。なぜそのような傾向が出てきたのであろうか。その答えは、中国の人びとが求めているもので日本にあるのがその2分野であるから、ということにつきるのではなかろうか。

さらに、両国民のお互いの国へのかかわり合いについてはどのような像が見えてくるであろうか。まず注目されるのは、日本では中国情報への接触度の減少傾向が、マス・コミュニケーション（「テレビ」と「新聞」）の場合でも、パーソナル・コミュニケーション（「家族」と「友人」）の場合でも、一致して見られるということである。他方、中国ではそれが日本ほど単純で直線的なものとはなっていない。つまり「テレビ」ではいくらか（4%）の減少が見られるものの、「新聞」では逆にいくらか（6%）の増加が見られるのであり、また「友人」ではかなり（16%）の減少が出てきているものの、「家族」ではほとんど変化は出てきておらず、さらに「同僚」という中国側だけで用いられた項目では77%という前回の中国側調査での「友人」のそれ（73%）を越える数値が示されたのである。ここでも、中国側については、「内容分析」や「制度分析」をも含めたさらに突っ込んだ研究が必要になってくるが、少なくとも日本側については、近年しだいにもりあがりつつあった、ある種の「中国熱」が「天安門事件」を契機として急激にさめていったという状況がその背後にあるものと考えて間違いなさそうである。

以上から、日本の中国イメージが特定の事件を契機にいわば「波動」とでもいうべき変化の方向をしめしているのに対して、中国の日本イメージは改革開放政策に支えられたいわば「趨勢」とでもいうべき方向を呈しているといえる。そして中国の場合、その趨勢が「ある特定のイメージ内容を回答する人びとの割合がますます高くなる」という回答の集中化現象としてあらわれてきているのである。この現象については、さまざまな要因がかかわり合っているものと考えられるが、やはりつぎのような点は否定できないであろう。それはそもそもある主体がある客体に対して持つイメージというものは、その客体のリアリティの反映であるだけでなく、その主体の欲求・期待・願望など主観の投影でもあり、その意味で二重の「鏡」という性格を持っているということである。具体的にいうならば、中国の対日イメージが一元化の方向を示しているのは、日本の社会の諸相がますます一元化の方向に進展しているからであるというだけでなく、中国の人びとの欲求・期待・願望

そのものもまた一元化の方向に拍車がかけてられているからであるということである。そして、その一元化の方向とは、いうまでもなく「豊かさと繁栄」ということにほかならない。こうして、現在、急速に進行しつつある日中間の交流が、そのようなイメージの一元化によってささえられたものであるとするならば、そこにはやはり大きな問題が内在しているといわなければならないのである。

（真鍋一史）

〈付録1〉

第1回調査は関西学院大学世論研究会（真鍋一史）と中国・吉林大学政治研究会（王恵岩、朱日耀、韓冬雪）が、日中両国で一般成人男女を対象に、1988年12月中旬から下旬にかけて、同時に実施した。

日本側の調査地域は東北（仙台）、関東（東京）、関西（神戸）で、ネクスト・バースデー・メソッド（電話帳で世帯をサンプルし、それぞれの世帯からつぎの誕生日が調査日に最も近い人を選んで回答を返送してもらう調査方法）を採用し、2900の一般世帯の成人男女対象から1015人の回答を得た（回収率35%）。

回答者の内訳は▽男72%、女28%▽仙台40%、東京27%、神戸33%▽20代10%、30代16%、40代23%、50代22%、60代以上28%、無回答1%となった。

中国側の調査地域は東北（長春）、華北（北京）、華中（上海）で、割当法を採用し、労働者、農民、知識人、幹部の4つの分野に対象者を分け、各地域の工場、農村、学校、官公庁などから無作為抽出で選んだ20歳以上の男女1050人を対象に個別面接調査法を行い、1022人の回答を得た（回収率97%）。

回答者の内訳は▽男57%、女43%▽長春33%、北京35%、上海32%▽20代30%、30代28%、40代23%、50代12%、60代以上2%、無回答5%となった。

つぎに第2回調査については、日本側の調査は、中央調査社（東京）が1992年11月12日から15日までの4日間、全国（157地点）から層化二段無作為抽出法によって選んだ2000人を対象に個別面接調査を行い、1428人から回答（回収率71.4%）を得た。回答者の内訳は▽男45%、女55%▽20代12%、30代17%、40代25%、50代22%、60代以上24%▽大都市21%、中小都市54%、町村25%となった。

中国側の調査は、中国国情研究会社会調査部（北京）が1992年11月1日から10日までの10日間、北京、上海、長春の3主要都市から順に750人、750人、500人を層化多段無作為抽出法によって選

び、個別面接調査を行ったが、補充サンプルを用意したために、回答者は2010人となった。回答者の内訳は▽男57%、女43%▽20代33%、30代28%、40代16%、50代15%、60代以上4%、無回答4%▽北京38%、上海38%、長春24%となった。

〈付録2〉質問と回答

（数字は%、小数点以下は四捨五入。タテの合計が100%）

◆あなたは「中国（中華人民共和国）」についてどのようなイメージを持っていますか。（中国側では「日本について……」と聞いた）

	日本		中国	
	1988年	1992年	1988年	1992年
①非常に豊か	0	1	26	39
かなり豊か	1	3	42	43
やや豊か	7	10	25	13
どちらともいえない	20	16	6	3
やや貧しい	37	34	1	1
かなり貧しい	29	26	0	0
非常に貧しい	3	6	0	0
わからない・無回答	3	4	0	1
②非常に近代的	0	0	25	33
かなり近代的	2	3	42	45
やや近代的	8	7	21	15
どちらともいえない	15	11	8	3
やや伝統的	28	27	2	1
かなり伝統的	35	36	1	1
非常に伝統的	9	12	1	1
わからない・無回答	3	4	0	1
③非常に民主的	1	0	3	4
かなり民主的	4	3	8	6
やや民主的	12	9	33	25
どちらともいえない	23	14	43	43
やや非民主的	28	25	7	13
かなり非民主的	23	30	4	4
非常に非民主的	7	12	2	4
わからない・無回答	2	7	0	1
④非常に信頼できる	6	2	1	3
かなり信頼できる	20	9	3	4
やや信頼できる	24	20	22	19

どちらともいえない	31	29	40	35
やや信頼できない	10	17	10	19
かなり信頼できない	5	10	7	10
非常に信頼できない	2	5	17	10
わからない・無回答	2	8	0	0

◆あなたはつきにあげるようなメディアで中国について読んだり、見たり、聞いたりすることがどの程度ありますか。(中国側では、「日本について……」と聞いた)

①テレビ

しばしばある	37	22	36	38
ときどきある	55	61	58	52
ほとんどない	6	15	4	7
まったくない	1	3	2	3
わからない・無回答	1	0	0	0

②新聞

しばしばある	36	15	13	17
ときどきある	50	55	47	49
ほとんどない	8	25	21	19
まったくない	4	5	19	15
わからない・無回答	2	0	0	0

◆あなたはつきのような人たちから中国について聞いたり、お互いに話し合ったりすることがどの程度ありますか。(中国側では、「日本について……」ときいた)

①家族

しばしばある	9	5	8	7
ときどきある	40	27	48	49
ほとんどない	31	42	27	34
まったくない	17	26	17	10
わからない・無回答	3	0	0	0

②友人

しばしばある	9	4	13	7
ときどきある	40	24	60	50
ほとんどない	30	40	16	33
まったくない	19	32	11	10
わからない・無回答	2	0	0	0

◆あなたは「中国」が好きですか、それとも嫌いですか。(中国側では「日本が……」と聞いた)

非常に好き	10	4	4	5
まあ好き	47	36	32	35
どちらともいえない	35	45	35	31

少し嫌い	5	11	19	23
非常に嫌い	1	2	9	6
わからない・無回答	2	2	1	0

◆あなたは「中国人」が好きですか、それとも嫌いですか。(中国側では「日本人が……」と聞いた)

非常に好き	8	4	2	4
まあ好き	48	32	31	30
どちらともいえない	38	50	39	32
少し嫌い	4	8	18	24
非常に嫌い	1	2	9	9
わからない・無回答	1	4	1	1

◆日本と中国との関係は、今後5年間によい方向に進むと思いますか。それとも、わるい方向に進むと思いますか。

非常によい方向に進む	11	3	7	19
まあよい方向に進む	69	62	43	50
どちらともいえない	16	27	44	29
少しわるい方向に進む	3	2	4	2
非常にわるい方向に進む	0	0	1	0
わからない・無回答	1	6	1	0

◆あなたは、今後、日本と中国の国際交流はさかんにするべきだと思いますか、それともそうは思いませんか。

非常にそう思う	57	20	36	39
まあそう思う	38	60	38	47
どちらともいえない	4	13	16	10
あまりそう思わない	1	4	7	3
まったくそう思わない	0	0	2	1
わからない・無回答	0	3	1	0

◆あなたは今後の日中関係にとって、とくにどの分野の交流が重要になってくると思いますか。(1つだけ)

貿易・経済の分野	50	44	27	45
科学・技術の分野	12	9	50	41
外交・政治の分野	18	13	4	4
文化・芸術の分野	6	14	4	2
旅行・観光の分野	5	9	4	2
スポーツ・体育の分野	2	2	1	1
教育・研究の分野	4	2	8	4
わからない・無回答	3	7	2	1

第2部

中国の教科書に見る日本人のイメージ

はじめに

学校教育は中国人の日本イメージ形成の重要な要因の一つであり、学校教育をとおして、日本に対する明確なイメージが植え付けられている。教科書に描かれた日本および日本人のイメージは中国人の日本理解の原点になる。

日本に関する知識は主に国語と歴史の授業で教えられる。国家教育委員会が制定した教科書種類が全国で使われている。日本関係の記述は歴史の教科書で最も多い。中国では小学校で歴史の初歩を勉強した後、初級中学で中国史を、そして高級中学に進んでから世界史をそれぞれかなり専門的な水準で学ぶことになっている。小学校教科書のうちほぼ10%、中学校教科書のほぼ20%が日本に関する事で、そのなかで、とくに日清戦争以後の日本の中国に対する侵略の歴史が克明に記述されている。そして、抗日戦争の部分だけで60ページ近くを費し、約20時間も当てられている。

ここでは、1986年に正式に制定された教科書に描かれた日本および日本人のイメージを分析してみよう。

I. 小学校の教科書

1. 国語

国語の教科書のなかに、日本関係の文章は4篇ある。抗日戦争に関するものは3篇、小学校5年の「狼牙山の五人の壮士」、小学校6年の「小英雄雨来」と「冀中の地下道戦」である。教科書のなかの日本人は皆こわいものとされている。日本を好意的に描いた文章は魯迅の「仙台にて」1篇しかない。

(1) 「狼牙山の五人の壮士」

これは実際にあったことで、抗日戦争での中国人の英雄像を描いたものである。日本の侵略者は日寇と呼ばれた。「1941年秋、日本の侵略者（日

寇）は兵力を集中して、わが晋察冀根拠地の狼牙山の地区に大挙侵犯してきた。当時、第7中隊が命令を受けて遊撃戦に突入した。一カ月余りの勇敢な戦闘の後、第7中隊は龍王廟一带に転戦することを決定し、居留民と中隊の移動を防衛する任務を第6分隊に与えた。」その後、第6分隊の5人の戦士は三方が絶壁の狼牙山頂に多くの敵を引き付けた。かれらは高所から下の敵に向かって銃撃を続け、かなりの敵が谷に墜落していった。最後に弾薬をすべて撃ち尽くして、5人の壮士は「日本帝国主義を倒せよ」「中国共産党万歳」というスローガンを叫んで、次々と絶壁から飛び下りた。

(2) 「小英雄雨来」

これは作家管樺が書いた小説『小英雄雨来』の一部分で、雨来という12歳の農村少年の物語である。この小説では日本兵は日本鬼子と呼ばれ、その凶暴さ、残酷さが生々しく描写されている。

日本鬼子は庭中を探し回った。家のなかもめっちゃめっちゃにされて、枕まで銃剣で突き破られ、両目が真っ赤に血走った鬼の上官が、オンドルの縁に座って中国語で雨来に尋問した。「子供よ、お前に尋ねるが、絶対に嘘を言っちゃいかんぞ。」ところが突然、この男は雨来の胸のあたりを見て、口を開けて真丸に目を見開いた。

雨来が頭を下げて見ると、さっきの騒ぎで国語の教科書が懐から飛び出していた。鬼子は教科書をパッと掴み取り、捲りながら、「誰がお前にくれたんだ？」と尋ねた。「拾ったんだよ！」と雨来が答えた。

鬼子は口いっぱいの金歯を剥き出し、偽善ぶった顔をして、穏やかに雨来に語りかけた。「恐れることはないんだよ。皇軍は子供を大事にしているんだよ。」こう言いながら、かれを縛っている縄を緩めさせた。

雨来は手を下ろしたが、腕が痺れて痛かった。鼻がべちゃんこの上官は、雨来の頭を撫でながら言った。「この本を誰がお前にくれたかなんて大したことではないから、もう聞くのはよそう。だ

が、も一つのことは全部話さなくっちゃだめだぞ。たった今ここに入ってきた人がいるはずだ。お前は見たよな！」雨来は手の甲で鼻を擦りながら「ぼくは家にいたけれど、何も見なかったよ。」とぶつぶつ呟いた。

鼻がぺちゃんこの上官の目付きは、たちまち恐ろしく凶悪になった。この男は一步前に進んで体を屈め、二本の大きな腕を伸ばした。ああ、その両腕はまるで鷹の爪のように雨来の二つの耳たぶを掴んで両側に引っ張ったのだ。雨来は口まで裂けるかと思われたほど痛かった。鬼子はそれから一本の手で耳を掴んだまま、もう一本の手で雨来の頬を二回平手打ちし、ものすごい力で頬をつねりあげた。雨来の顔には、たちまち白い所や赤い所や紫色の所ができてしまった。その後、鬼子はかれの胸を殴りつけた。雨来はのけぞって後ろに飛ばされ、戸棚に後頭部をぶつけた。すぐに立たされ、今度は腹をオンドルの縁にぶつけてしまった。

雨来はしばらく息ができなくて、頭のなかがまるで蜂の巣のようにワンワン鳴っていた。目からチカチカ星が飛んでいるようだし、鼻からは血が流れ出ていた。その血は、床に投げ出された教科書の「私たちは中国人です。私たちは自分の祖国を愛しています。」という文字にぼたぼたと落ちた。

鬼子が打つのに疲れても、雨来はまだ歯を食いしばり、「僕は見ていない」と言い続けた。

鼻がぺちゃんこの上官は怒って飛び上がり、どら声を張り上げた。

「銃殺、銃殺だ！引きずりだせ！引きずりだせ！」

(3) 冀中の地道戦

これも抗日戦争中、河北省に起きた実際のことである。「1942年から1944年にかけての数年間、日本侵略軍は冀中の平原で『大掃蕩』を行った。そして、封鎖溝を作りバリエードをめぐるし、たくさんのおちかき家を築いて、わが人民武装を潰そうとしたのである。この敵の『掃蕩』を粉碎するために、冀中の人民は党の指導の下に新しい闘争方式を開発した。これはすなわち地道戦である。」

「敵は地道戦の苛烈さを身にしみてわかってから、何とかこれを破壊しようとして、火攻め、

水攻め、毒ガス攻めとあらゆる方策を試みた。そこで中国人民はまた、いろいろな巧妙な方策を考え出して地道を防備した。」この文章は中国人民の知恵と日本侵略者の残虐さを表現したものである。

2. 歴史

小学校6年の歴史の教科書における「中日黄海大戦」「西安事変」「蘆溝橋事変」などの日本関連の記述はすべて日本の中国侵略に関するものである。日本そのものの歴史に関する記述としては「日本の明治維新」がある。

(1) 中日黄海大戦

1894年新興の資本主義国日本は朝鮮に出兵し、首都ソウルを占領した後、中国に侵略戦争を仕掛けてきた。この年は中国旧暦の甲午の年に当たっていたので、この戦争を「甲午戦争」（日清戦争）という。黄海大戦は甲午戦争における激しい海上戦闘であった。戦争後、清政府と日本政府は「馬関条約」に調印した。この「馬関条約」によって中国の半植民地化がますます深刻になっていったのである。

(2) 西安事変

西安事変の背景についてこう紹介されている。「1931年9月18日、日本帝国主義は中国東北部に侵略戦争を起こした。この時、国民党政府は日本の侵略に対し無抵抗の政策を採ったので、日本軍は短時間の間に中国東北部と華北の広大な土地を占領した。中華民族は生死の岐路に立ったのである。1935年8月1日、中国共産党は全国抗日民族統一戦線を作り上げるという主張を提出し、国民党政府に内戦を停止し一致して外敵に当たるよう要求した。全国人民は中国共産党の呼び掛けに応じ、抗日救国の新たな高まりを見せた。」

西安事変とは、1936年12月12日、国民党政府の東北軍將軍張学良と17路將軍楊虎城が西安で蒋介石を逮捕し、全国に内戦停止、連共抗日を要求する電文を発するという事件であった。

蒋介石は迫られてやむなくこれらの条件を受け入れた。これにより、張学良は蒋介石を釈放した。このようにして西安事変は平和的に解決され、抗日民族統一戦線が形成され始めた。

(3) 蘆溝橋事変

蘆溝橋事変は抗日戦争の導火線である。1937年の7月7日深夜12時、日本側は兵士が1名失踪したと称し、蘆溝橋付近の宛平県市街に進入し捜査することを要求した。この不法な要求は中国軍隊によって厳しく拒否された。日本軍はこれを口実に多くの兵隊で宛平県城を包圍した。午前2時になっても日本側はまだ不法な要求を喚き続けた。こうして双方がまさに談判を続けていた時、戦争を挑発する意図を抱いていた日本の軍隊は凶暴にも宛平県城に砲撃をし始め、同時に蘆溝橋の中国守備軍に一齐に侵攻を開始した。中国守備軍も忍耐の限界に達し奮い立って抵抗した。

中国人民はこれ以来8年にわたる苦難の抗日戦争を開始したのである。そして、1945年8月、中国共産党の指導の下に中国人民はついに日本帝国主義を打ち破り、抗日戦争の偉大な勝利を勝ち取った。

(4) 日本の明治維新

まず明治維新前の日本の状況がつぎのように紹介されている。「19世紀中頃の日本はまだ遅れた封建国家であった。天皇は名義上の最高統治者であったが、これは名ばかりもので、実権は『大將軍』の手に握られていた。19世紀60年代には農民と市民の蜂起が燎原の火のように全国に広がった。このような人民の革命闘争は幕府の反動的な統治を揺るがした。日本の西南方面の武士は資本家の支持のもとに、人民の闘争の力を利用して、幕府に対し『大政奉還』を迫り、天皇中心とする新政権を確立した。」

1868年、新しく即位した明治天皇は、資本主義の発展に有利な一連の改革を実行した。これが「明治維新」である。

明治維新を経過して、日本の資本主義経済は急速に発展した。日本は外国の植民地主義の圧迫から逃れて、強く盛んな国へと変わっていった。それから間もなく、日本は海外への侵略拡大を開始し、帝国主義列強の一つとなったのである。

II. 中学校の教科書

中学校には『中国歴史』という授業がある。2年生は古代史、3年生は近代史と現代史を中心に学習する。古代史では中日両国の長い友好交流史を

紹介しているが、近代以後ではほとんど日本の中国に対する侵略の歴史に絞って教えている。

1. 唐と日本の交流

日本関連の記述は『中国歴史』第2冊目の唐王朝の対外関係の部分に初めて出てくる。中国と日本との関係はこう紹介されている。「日本は早くから我国と交流があった。漢の時代に日本の使者はすでに我国に来ていた。唐の時代には中日両国の交流が更に密接となった。我国に来た日本の“遣唐使”は13回に及ぶ。この遣唐使に従って多くの官吏や留学生が唐王朝に来て、その数は多いときには5、6百人にもなった。留学生は唐王朝で哲学、歴史、政治制度、文学、芸術、生産技術を学んだ。この留学生のなかには中国に40年にも留まった人もいたが、多くの留学生は帰国してから唐王朝の文化を積極的に日本に広めた。」

そして、日本人の阿部仲麻呂の中国の詩人李白、王維との友情、中国の鑑真和上は生死の境をさまよいながら6度渡日を試み、ついに日本に到着し、唐王朝の文化を日本に伝えたなど中日友好交流の事実を紹介している。

最後には、唐の時代の文化の日本に与えた大きな影響について、「日本人の飲食、服装、日常生活には今もある種の唐王朝風の様式が残っている」と述べている。

2. 明王朝と日本の関係

この部分の日本関連の内容は二つがある。一つは「東南沿岸軍民の倭寇駆逐の闘争」。元王朝の末年から日本の九州一帯の封建諸侯は武士や商人、海賊などを集めて常に我国の沿海地区を騒がせた。沿海の住民はかれらを「倭寇」と呼んだ。もう一つは「朝鮮支援戦争」。日本軍隊は1592年と1597年2回朝鮮に侵攻した。いずれも朝鮮および明政府の軍隊に撃退された。

3. 甲午中日戦争

中国ではアヘン戦争から1919年の五・四運動までの歴史は近代史と呼ばれている。この時期の日本関連の記述は日本の中国侵略の歴史の紹介が主である。

甲午中日戦争については、小学校の歴史の教科書における「中日黄海大戦」の部分でも教えられたが、中学校に入って、もっと詳しく学習する。日本の朝鮮に対する侵略、中日戦争、中日馬関条

約、日本の台湾省占領に対する中国軍の闘争などが含まれる。

4. 日露戦争

この戦争によって、多くの中国人が殺害され、家屋が焼かれ、家畜や財産が掠奪されて、広大な農地が荒れ果てた。日露戦争以後、中国東北は帝政ロシア一国による占領の状況から、北部をロシアが抑え、南部を日本が抑えるという局面を迎えることになった。

5. 「二十一カ条の要求」

日本は中国に対する侵略を拡大するために、1915年1月、「二十一カ条の要求」を提出した。日本にいた中国人留学生たちはただちに国内に電報を打ち、全国人民が団結して日本の侵略に立ち向かうように呼び掛けた。各地に日貨排斥運動の声が大きく沸き起こった。

6. 「5・30運動」

1925年5月15日、上海の日本紡績工場の中国人労働者は、賃金がカットされたことに抗議してストライキを行った。日本の資本家は共産党員の労働者顧正紅を銃殺し、その他十数人の労働者を殺傷した。この暴行に対し上海の労働者、学生を初め広範な市民が憤激した。5月30日、上海の学生や労働者は抗議デモを行った。これに対し、イギリスの警官は発砲し、その場で11人が殺され、数十人が負傷した。これが「5・30事件」である。

7. 中国人民の日本帝国主義侵略に反抗する闘争

(1) 「9・18」事変

1931年9月18日、東北に駐留していた日本の関東軍は詳細な計画を練り上げ、その守備隊に命令して南満州鉄道瀋陽近郊の柳条溝のレールを爆破した。そして、これは中国軍がやったことだと偽り、これを口実に東北軍駐屯地北大営を砲撃し、瀋陽を襲撃した。「9・18」事変の勃発である。

(2) 「1・28」事変

1932年1月28日深夜、日本海軍陸戦隊は上海閘北に駐屯していた19路軍を奇撃し、「1・28」事変が勃発した。

(3) 東北の抗日武装闘争

東北の広大な土地に漢族、朝鮮族やその他の諸民族によって組織された抗日武装闘争が嵐のように沸き起こった。また、多くの労働者、学生が農村に入り込み、農民と一緒に抗日遊撃隊を組織し

た。

8. 抗日戦争

抗日戦争は中国の現代史のなかで中心的な位置を占め、この部分の記述は膨大なもので、じつに詳細をきわめている。主な内容は、蘆溝橋事変、日本軍の全面侵攻、上海会戦と南京陥落、太原会戦と徐州会戦、武漢会戦と失敗、中国共産党の抗日戦争持久の方針、日本侵略者の侵略方針の変更、日本軍の反日根拠地に対する「大掃蕩」、百団大戦、日本の占領地区に対する経済的掠奪、反「掃蕩」反「蚕食」反「清郷」、抗日戦争の勝利、などである。

この部分では日本軍の暴行を詳しく記述している。南京大虐殺について、前後の侵略経過を含めて、リアルな表現で、しかも写真2枚まで載せて扱っている。「日本軍は南京占領以後、南京人民に対し6週間の長期にわたって人類史上かつてない血腥い大虐殺を行い、最も恥ずべき罪を犯した。南京で平和に暮らしていた住民たちは、射撃的にされ、銃剣突きの練習人形にされ、生き埋めにされ、揚子江に追い詰められて溺れさせられ、心臓と肝臓を抉り取られ、その惨状は目を覆うばかりであった。12月16日、日本軍は住民5千余名を下関中山埠頭に連行し機関銃で射殺した。18日夜も、日本軍は幕府山に拘留していた住民とすでに武装解除された兵士5万7千人以上を下関草鞋峡に駆りたて、まず機関銃で掃射をした後、まだ死んでいない人びとを銃剣で刺し殺し、それから更に石油をかけて死体を焼き、残った骨を全部揚子江に投げ捨てて、犯罪の証拠を湮滅した。調査によると南京大虐殺において日本軍によって殺害された中国人民は30万に達し、三分の一の家屋が焼かれたり壊されたりした。その当時、南京城内には、死体が累々と横たわり、瓦礫が山のようになって、凄惨な血腥い風が吹き渡り、まさにこの世の地獄と化した。この日本軍の凶悪残虐きわまらない行為は、中国人民の激しい憤怒を呼び起こした」と述べている。

戦争中、日本軍の使った戦闘手段は非常に残酷であった。1939年3月、日本軍と中国軍隊は南昌周辺で激烈な争奪戦を展開し、日本軍はなんと毒ガスを放って南昌を死守したのである。中国の軍隊には悲惨な死傷者が続出した。日本軍が「掃蕩」

したところではどこでも殺人、放火、掠奪が行われた。日本軍が細菌戦を行ったことについてはつぎのような記述がある。「日本軍は中国占領の目的を実現するために、中国で非人道的で残虐的な細菌戦を展開した。『9・18事変』後、日本侵略軍は東北に細菌戦を専門に研究する部隊（石井部隊、またの名を731部隊）を設立した。かれらは生きて人間を使って実験するために、中国の軍人や民間人を連行してきて、その人達を「丸太」と呼び、実験材料としてしたい放題の人体実験を行った。たとえば、細菌液を注射するとか、細菌を培養した物を飲食させるとか、さらにひどい場合は生体解剖を行うなどの実験をして、3000名以上の人びとを生きのまま虐殺した。石井部隊はペスト菌、腸チフス菌、コレラ菌などを培養した。これらの細菌は寧波、常德地区と晋察冀などの抗日根拠地の作戦に使われ、無数の中国軍人と民間人に悲惨な毒害をもたらした。」

Ⅲ. 高校の教科書

1. 国語

高校の国語の教科書の中には、日本関係の文章が2篇あるが、それは「包身工」と「桜賛歌」である。

(1) 包身工

「包身工」は作家夏衍のルポルタージュである。30年代上海における日本の工場の女性労働者の悲惨な生活を描いたものである。一種の特殊な優遇・保護の下に、中国における日本の紡績工場は飛躍的に膨張した。上海楊樹浦臨福路だけで、紡績工場6、紡織工場5、紡錘数25万、紡織機3000、労働者数8000、そして資本金1200万円にも拡大していた。筆者は「日本の紡績工場の紡錘一つ一つには中国人奴隷の怨念がまつわり付いている」と書いている。

(2) 桜賛歌

これは作家氷心の散文である。筆者は自分が中国作家代表団の一員として1963年に訪日した体験を書いている。金沢を訪問した時、翌日が全市のタクシー労働者のストライキの日当たっていることを聞いた。もともと、ストライキの決行は朝の8時だが、中国代表団を駅まで送らなければな

らないということで、運転手たちは緊急会議を開き、ストライキの決行を朝9時に変更した。筆者がお礼の言葉を言おうとすると、運転手さんは「日中人民の友好を促進することも闘争の一部です」と言った。最後に、著者はつぎのような感慨を述べている。「タクシー運転手のたった一言が、日本の労働者人民の中国人民に対する厚い友誼を表しているようで、深く私の心を動かして、金沢の野山一面の桜の花がまるで中日人民友好の雲海のような幻想を私に抱かせたのだ。」

2. 歴史

高校には『世界歴史』の授業がある。日本関連の記述には古代から第二次世界大戦終戦までのものがある。

古代の部分は日本国家の形成、大化の改新、中日文化交流を紹介している。近代の部分では武装倒幕、明治維新、帝国主義国家の形成、朝鮮人民の反日闘争などが中心である。現代の部分は朝鮮の「3・1」運動、第一次世界大戦後の日本、「2・26」事件、中国の抗日戦争、朝鮮人民の抗日武装闘争、第二次世界大戦、日本帝国主義の降伏、などである。

『中国歴史』と比べて、『世界歴史』の教科書に日本についての記述が登場するのはきわめて限られており、一つの独立した項目として取り上げられているのは、わずかに「明治維新」と「第二次世界大戦」くらいのものである。

おわりに

近代の日中関係は、基本的には、日本の中国に対する侵略とそれに対する中国人の抵抗の歴史であった。日本は一貫して敵対者として登場している。日本帝国主義に反抗する闘争は、長期にわたって、中国革命の主要な課題であった。したがって中国人の日本観には、日本民族のもつ長所や明治維新以降の近代日本の発展に対する評価、称賛なども部分的には含まれるが、基調をなしているのは、当然のことながら、日本の侵略とそれをささえる日本の政治、経済、社会、文化などに対する批判、警告である。多くの中国人のかなり根の深い反日感情の原点は教科書にあるといえるだろう。

(劉志明)